



岩崎育英奨学会

第1回 政経マネジメント塾

南洲翁遺訓から読み解く  
「リーダーと論語」

岩崎育英奨学会

岩崎学生寮・事務長

青柳 浩明

## 序章 はじめに

西郷南洲翁が学んできた多くの学問、そして『西郷南洲翁遺訓』の中核にあるのは『論語』であり、徳というものである。それに触れ、本講義の目的を述べる。

## 第1章 論語とは

『論語』に対する先入観を解くべく概説し、特徴をみていく。

## 第2章 修己 ～自分との関わり～

他人をコントロールしたくなるのは人の情であり、その実現方法は、圧倒的な権力（生殺与奪（人事権）・法律）または徳（心を動かす）の2種類に大別される。国家の恒久的な存続、企業のゴーイングコンサーンを考える場合、移ろいやすい人々を導くためには、徳による治政が肝要である。その際、指揮命令システムの頂点や上位層に位置する為政者やトップに求められる人間性を「修己」として取り上げる。

⇒「(抜粋版)ビジネス訳 西郷南洲翁遺訓」 第27条 (P.7)、第21条 (P.5)

## 第3章 治人 ～組織内の人々との関わり～

己を修めたものは、はじめて無理なく、他人を治める可能性がある。創業期においては、ルール of 徹底や厳正な処罰が重要であろうし、成熟期においては、自立した人々の自主性の発揮が重要となる。所属する組織内の人々との関わり方の原則について「治人」として取り上げる。

⇒「(抜粋版)ビジネス訳 西郷南洲翁遺訓」 第2条 (P.2)、第39条 (P.8)

## 第4章 主権 ～他組織との関わり～

己を修め、組織内を治めることができ、思う存分、組織外の世界とわたりあえる状態となる。孫子の「彼を知り己を知れば百戦危うからず」（謀攻編）である。さもなければ、内憂外患の状況に陥る可能性が高い。組織外とのかかわりにおいては、単に競争・連携・協調・対立という外交面だけでなく、文化・風土面における悪習の浸透・浸食に留意することも重要となる。この他組織との関わりにおける原則を「主権」として取り上げる。

■われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立とうとする各国の責務であると信ずる。  
(日本国憲法前文3項)

⇒「(抜粋版)ビジネス訳 南洲翁遺訓」 第8条 (P.3)、第18条 (P.4)

## 序章 はじめに

西郷南洲翁は、朱子学・陽明学などを学び、「知行合一」<sup>ちこうごういつ</sup>を実践された稀有な偉人の一人である。この学問の源泉は、郷土教育の教材でもあった『論語』にある。

『論語』において、人として目指したい理想像として、徳に満ち溢れた「君子」<sup>くんし</sup>という最上級の人物が定義されているが、その代表的人物が、紛れもなく、西郷南洲翁である。

『論語』に対極の存在として「小人」<sup>しょうじん</sup>という人物が定義されているが、これは完全否定されるものではない。これについて、「徳」と「才」の関係から述べる。

「君子」とは、大統的な「徳」が、部分的に生活に役立つ諸々の能力である「才」に勝っている人物のことである。

一方の「小人」とは、「才」が「徳」に勝っている人物である。「才」そのものは絶対的価値は高く、これ無くして技術発展は為し得ないものである。しかし「徳」との相対性においては低いのである。

南洲翁も学んだ『菜根譚(前集)』<sup>さいこんたん</sup>（中国・明の人の洪自誠<sup>こうじせい</sup>）にこうある。

「徳は才の主にして、才は徳の奴なり。」

才有りて徳無きは、家に主無くして、奴、事を用いるが如し。

幾何ぞ魍魎ありて猖狂せざらん。」

「徳は事業の基なり」<sup>もと</sup>

本講義は、西郷南洲翁の言行録である『西郷南洲翁遺訓※』を通して、リーダーが『論語』から、どのような「徳」を学び実践していたのかを理解し、私たちの人生に活かすことを目的とする。

※(財)西郷南洲顕彰会版(第三版)参考

## 第1章 論語とは

簡単に『論語』と孔子について、特徴について触れておきたい。

### 1. 言行録

紀元前500年頃（春秋時代）、聖人孔子とその弟子や国王・諸侯との言行録

※釈尊、イエス、ソクラテスも同様に、自ら執筆したものはなく、弟子が記述した。

### 2. 述べて作らず

当時の中国において、教え継がれていた教えを体系的に学問として確立したのが孔子であり、その教えの中核が『論語』である。

「述べて作らず。信じて古<sup>いにしえ</sup>を好む。窃かに我<sup>ひそ</sup>を老彭<sup>ろうほう</sup>(殷の賢大夫)に比す。」(述而)

「我は生まれながらにして之<sup>これ</sup>を知る者に非ず。  
古を好み、敏<sup>びん</sup>にして以て之<sup>もつ</sup>を求めたる者なり。」(述而)

### 3. エンプロイアビリティ向上

『論語』は単なる道徳本ではない。孔子教団における最重要教本であり、教団の目的は、生徒の各国への仕官の実現であり、エンプロイアビリティ向上であった。

仕官後は、即戦力が期待されていたため、政治学・人物学だけではなく、為政者としての人格形成も必須科目とされた。

### 4. 基本概念

克己	復礼
修己	治人
倫理・道徳	政治
セルフコントロール	リーダーシップ・ マネジメント

「孔子は御人好し（性善説）、韓非子は非情（性悪説）」という極論を耳にする。確かに中高生の頃に「孟子は性善説、荀子は性悪説」と暗記をさせられた。しかしながら、始祖である孔子は中庸であり、性善説・性悪説という分別はしていない。

孔子は、現代風に言えば、ケン・ブランチャード提唱のシチュエーション・リーダーシップの実践者であり、組織、人の成熟度に合わせた統制・指導・育成を実践された。このことは、司馬遷の『孔子世家(史記)』および『論語』の副読本である『孔子家語』から伺える。

「春秋に義戦なし」といわれるほどの乱世において、単なる御人好しの道徳家では、国家を維持することなど不可能なのである。

## 5. 日本・日本人のDNA

好むと好まざるにかかわらず、我々日本人に染み込んでいる思想・教えである。

### ◆熟語

道徳、啓発、遠慮、内省、礼義、損益、義務、敬遠、戦慄、不惑、為政、朴訥……

### ◆四字熟語

温故知新、用舎行蔵、道聴塗説、巧言令色、剛毅木訥、造次顛沛、克己復礼……

### ◆故事成語

一を聞いて十を知る、義を見てなさざるは勇無きなり、一日の長、  
過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし……

### ◆組織団体名

三省堂、有隣堂、学習院……

## 6. 構成 ～お父さんの日記～

20編・499章句・1520字種・13700文字数で構成された書物である。

昭和の<sup>たいと</sup>泰斗と称される<sup>やすおかまさひろ</sup>安岡正篤先生は、『論語』について次のように喝破している。

「現代を最もよく把握し、最も正しい結論を得ようと思えば、  
論語で十分であるといっても過言ではない。」

「今日の人間が考えるようなことはことごとく論語に書いてあります。」

(いずれも「論語に学ぶ」から)

とすれば、人生のことごとくが1520字種で表現されていることであり、一字一字に込められた意義・真意が深いといえる。

但し、499章句は、体系的に20編に編成されているわけではなく、教えが分散している。それは、お父さんの日記を読むが如し、である。

そのため、一字の理解、教えの統合的・総合的な理解には 非常に時間・経験を要し、表面的な理解では誤解を招きやすい。

例) 仁：59章句で登場し、20編中16編にわたる